2023 年度

札幌市立大学大学院看護学研究科　博士論文要旨

ISPCAN Child Abuse Screening Tool-Parent version3 (ICAST-P Ver.3)の日本語版の開発

札幌市立大学大学院看護学研究科看護学専攻博士後期課程

学籍番号　2175001　氏名　岩﨑　美輝

Ⅰ．研究の背景

2009 年、国際子ども虐待防止学会(以下 ISPCAN)は、世界中で起きている深刻な子ども虐待を予防するために、ISPCAN Child Abuse Screening Tool-Parent version1 (以下 ICAST-P Ver.1)を開発した(Runyan et al.,2009)。ICAST-P Ver.1 英語版は親を対象とする自己記入式質問調査票であり、過去 1 年間における子どもに対する親のしつけの行動から育児による子どもの加害状況を測定する。2009 年以降、ICAST-P Ver.1 英語版は 16 言語に翻訳された。その後、2 度の改訂を経て、2015 年に ICAST-P Ver.3 英語版が作成された(Runyan et al.,2015)。設問は、43 項目(非暴力的しつけ 6 項目、身体的虐待 16 項目、心理的虐待 14 項目、ネグレクト 5 項目、性的虐待 2 項目)で構成されている。ICAST-P Ver.3 英語版(以下原版)は、スペイン語、ロシア語、韓国語、中国語に翻訳されているが、未だ ICAST-P Ver.3 の日本語版は開発されていない。

そこで、本研究は、ICAST-P Ver.3 日本語版(以下日本語版)を作成し、信頼性と妥当性を検証することを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．研究デザイン

記述的研究デザイン。

２．第 1 研究

Manual for Administration : The ICAST に定められた方法に従い翻訳した。手順は、①ISPCAN に開発許諾を取得、②研究者はバイリンガル 2 名(1 名は子ども虐待に精通した専門家、1 名は子ども虐待の専門家ではない)による順翻訳の相違点を検討し順翻訳版を作成、③研究者はバイリンガル 2 名(子ども虐待の専門家ではない)による逆翻訳の内容を原版と比較、④原版に戻らなかった項目は逆翻訳を再度依頼し検討、⑤日本語版(案 1)の作成、であった。また、COSMIN 研究デザイン・チェックリストの翻訳プロセスを参照とし正確性を確保した。

３．第 2 研究

日本語版の内容的妥当性の検証を行った。方法は、①保育園に通園している 3 歳以下の子どもを持つ母親 7 人を対象とし日本語版の回答を依頼、②対象者に半構造化インタビューを実施(認知デブリーフィング)、③専門家会議を行い日本語版の適切性と網羅性を検討、④日本語版の完成、であった。

４．第 3 研究

1 歳 6 か月児健診と 3 歳児健診に来所した 3 歳以下の子どもをもつ母親を対象に、日本語版の信頼性と妥当性の検証を行った。

Ⅲ．倫理的配慮

札幌市立大学大学院看護学研究科倫理審査会の承認を得た(2022 年度 No.6、

No.17)。

Ⅳ．結果

１．第 1 研究

順翻訳では、7 項目について検討を行い修正した。その後、順翻訳版を作成し、逆翻訳を行った。逆翻訳は、2 回繰り返した。1 回目では 9 項目の修正を行い、2 回目では 3 項目の修正を行った。修正後、日本語版(案 1)を作成した。日本語版(案 1)を ISPCAN に提出し審査を受けた。審査後、「修正箇所なし」との回答を得、使用許諾を得た。

２．第 2 研究

対象者は日本語版(案 1)の全設問に回答し、誤回答はなかった。回答所要時間は平均 15 分であった。適切性に関する指摘は、対象者のインタビューにおいて 8 項目、専門家会議において 8 項目あり修正した。網羅性に関する指摘はなかった。以上より、日本語版を完成した。

３．第 3 研究

日本語版の配布数は 1200 部であり、回収数は 306 部(回収率 25.5%)、有効回答数は 300 部(98.0%)であった。信頼性は日本語版全体の Cronbach'α 係数が 0.67、折半法による信頼性係数が 0.72 であった。構造的妥当性における探索的因子分析では、3 因子が抽出された。第 1 因子は身体的虐待、第 2・3 因子は身体的虐待、心理的虐待、ネグレクトが混在した。確認的因子分析では、適合度指標が算出できなかった。構成概念妥当性では、尺度化成功率が 87.2～100％であった。異文化間妥当性では、非暴力的しつけが他国と比較し高い割合を示した。虐待行為では、「鬼がくると脅す(心理的虐待)」「大人が誰も見ていなかったため怪我をした(ネグレクト)」が他国よりも高い割合を示した。各項目の平均値は、非暴力的しつけ 3.01、中程度の体罰 0.11、厳しいしつけ 0.01、心理的虐待 0.39、ネグレクト 0.05、性的虐待 0 であった。子どもの年齢による比較では、身体的虐待と心理的虐待は、1 歳より 3 歳の方が有意に高かった($p<.01$)。ネグレクトは、3 歳より 1 歳の方が有意に高かった($p<.01$)。また、家族の中での立場における比較では、非暴力的しつけにおいて有意差を認めた($p<.05$)。

Ⅴ．考察

第 1 研究の翻訳過程は、Manual for Administration : The ICAST に則して行い、適正な手順を経て日本語版(案 1)を完成した。第 2 研究では、認知デブリーフィングと専門家会議において日本語版の適切性と網羅性を検討し、日本語版の内容的妥当性を確保した。第 3 研究では、日本語版の信頼性と妥当性が保たれていること確認した。特に、異文化間妥当性では日本語版が本邦において文化適応していることを確認することができた。また、本結果は、3 歳以下の子どもをもつ親のしつけや子ども虐待における本邦の特徴を見出した。ポジティブなしつけである「非暴力的しつけ」行っている一方、「鬼がくる」「大人が誰も見ていなかったため怪我をした」は虐待行為であるという認識が低かったことを明らかにした。

Ⅵ．結論

日本語版は、本邦において適用可能なツールである。また、日本語版は本邦における親のしつけの特徴や子ども虐待の特徴を明らかにすることが可能である。